

大学教員とは何者なのか —ボーダーフリー大学教員に着目して—

葛 城 浩 一

神戸大学大学教育研究センター准教授

[キーワード] ボーダーフリー大学、教育と研究の両立、専門職、大学教授職

I. はじめに

大学教員とは何者なのか。この本特集テーマの問いに迫る上で、まずは大学教授職研究の第一人者である有本(2011)の次の指摘を押さえておこう。有本は、「研究と教育を両立させることは、単なる大学教員ではなく「専門職としての大学教員」、すなわち「大学教授職」(academic profession)に不可欠の使命となる」(2)と述べている。この指摘からわかるのは、大学教員には「専門職としての大学教員」と「(専門職とはいえない)単なる大学教員」が存在するという、そして「専門職としての大学教員」の要件となるのは教育と研究の両立であるということである。なお、本稿では、「専門職」という表現を、有本の上記の定義に即して用いることとする。

さて、この教育と研究の両立であるが、世界的にみてその両立がもっとも困難なのは日本の大学教員であるとされている(福留 2011)。そんな日本の大学教員の中でもその両立がもっとも困難であるのは、日本の高等教育の裾野に位置する「ボーダーフリー大学」と呼ばれる大学(本稿では、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義)に所属する教員(以下、ボーダーフリー大学教員)といえるだろう。なぜなら、ボーダーフリー大学は、入試による選抜機能が働かないため、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、早けれ

ば小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れているため、当該大学への教育に対する社会的期待が非常に大きい反面、研究に対する社会的期待はさほど大きなものではないからである。「専門職としての大学教員」の要件をもっとも満たしにくいゆえに、ともすれば「単なる大学教員」になりかねないボーダーフリー大学教員は、「大学教員とは何者なのか」という本特集テーマの問いに迫る上ではこの上ない対象であるといえよう。

さて筆者は、ボーダーフリー大学を対象とした先行研究が散見されるようになってきた2000年代前半から、こうした大学に着目して研究を行ってきた。特に近年では、ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証(以下、教育の質保証)という観点から論じてきたところである(葛城編 2019・2020等)。しかし、これまで行ってきた研究は、上記のように、社会的期待が非常に大きい教育に焦点を当てたものであり、それがさほど大きなものではない研究の視点が十分であったとはいえなかった。ボーダーフリー大学が教育と研究を主要な機能とする「大学」である以上、その教育(の質保証)のあり方について考える上では、教育だけでなく研究に焦点を当てることも極めて重要である。すなわち、これまでの研究では十分に検討の及ばなかった、「ボーダーフリー大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という問いにこたえることが、筆者の目下の研究課題である。

こうした問いに迫ることは、ボーダーフリー大学教員が「専門職としての大学教員」としてどうあるべきか(場合によっては「専門職としての大学教員」であるべ

きでない、という結論も含め)、その論点を提示することでもある。なお、「大学教員とは何者なのか」という本特集テーマの問いに照らせば、実務家教員や教育専任教員等は非常に興味深い存在ではあるが、本稿では論点をクリアにするために、主な職務として「研究」が求められるそうした教員は言及の対象としない。以下では、上記の問いにこたえようとするこれまでの研究の成果を概観するとともに、実施したばかりの調査をもとに、ボーダーフリー大学教員が「専門職としての大学教員」としてどうあるべきかについて論じてみたい。それを通じて、「大学教員とは何者なのか」という本特集テーマの問いに迫ってみたいと考える。

II. 先行研究では「何が」「どこまで」明らかにされているのか

「ボーダーフリー大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という本研究の問いは、「教育と研究の関係性」という研究テーマに位置づくものである。この研究テーマ自体は、国内外を問わずこれまで様々な論者によって様々な論点から論じられてきた、すべての「大学」に共通する歴史あるテーマである。しかし、遠藤(2005)の「マージナル大学(ボーダーフリー大学に相当する分類概念)においては、研究と教育との乖離が極限まで進んでしまっているということ。また、研究者であれば当然であるはずの学究志向が、マージナル大学においてはリスク要因＝諸刃の剣と化してしまう」(275、括弧内は筆者)という指摘に鑑みれば、両者の関係性に関わる問題が凝縮されて顕在化しているとも考えられるボーダーフリー大学に着目することは、この研究テーマに現代的な論点を提示するという意味において特に重要であるし、その意義も大きいものとする。

しかし、ボーダーフリー大学は、高等教育研究における研究対象としてこれまで等閑視されてきた⁽¹⁾。そのため、ボーダーフリー大学を対象とした実証的な先行研究は数が限られており、その多くはそこに所属する学生を分析対象としたものである⁽²⁾。教育と研究の関係性について触れている可能性の高い教員や組織を分析対象としたものとなると、筆者を除けばごくわず

かに過ぎない。

そこで、研究が教育にどのような影響を与えるのかという意味合いにおいての、教育と研究の関係性について触れている、(筆者が行ってきた)ボーダーフリー大学を対象とした実証的な研究をレビューしたのが、葛城(2021)である。すなわち、この論文では、そうした研究のレビューを通じて、「ボーダーフリー大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という本研究の問いに対して、これまでの研究で「何が」「どこまで」明らかになっているのかを整理している。そこで得られた知見は、以下の通りである。

第一に、研究に対する教員の関心に関する問いを用いた研究からは、ボーダーフリー大学における教育の質保証の実現を妨げるのは、研究に対する当該大学教員の関心の「高さ」ではなく、「偏り」である可能性を示唆する結果が確認された。第二に、教育活動に対する研究活動の有用性についての教員の認識に関する問いを用いた研究からは、ボーダーフリー大学教員の研究活動が、当該大学における教育の質保証の実現を促す可能性を示唆する結果が確認された。第三に、教員の研究に対する所属組織の考え方がうかがえる問いを用いた研究からは、ボーダーフリー大学において人事の際に研究を重視することは、当該大学における教育の質保証の実現を促すこともなければ妨げることもない可能性を示唆する結果や、研究活動に対する支援を充実させることは、その実現を妨げる可能性を示唆する結果、教員の研究にけるエフォート管理を行うことは、その実現を促すのではないかと所属組織が考え始めている可能性を示唆する結果が確認された。

こうした知見をふまえ、本研究の問いに対しては、「少なくとも現時点では」、教員においても所属組織においても「偏り」がない限りにおいて、「研究」が教育の質保証に(ポジティブな影響を与えるかどうかはさておき)ネガティブな影響を与えるリスクは低い、と結論付けている。そしてその上で、本研究の問いに対してもっともポジティブな「こたえ」を示した第二の知見について、それがボーダーフリー大学の現場で教育にあたる当事者の認識を反映したものであるから尊重しなければならない反面、当事者の認識を反映したも

のだからこそ、「ノイズ」が生じている可能性に留意しなければならないと指摘している。なぜなら、特に第二の知見を導いた問いは、遠藤(2005)が「マージナル大学問題の核心部分」(287)と指摘する「研究者としてのアイデンティティ・クライシスの問題」(286)に抵触するものとも考えられるからである。そして、こうした知見が(どの程度)「ノイズ」によって歪められたものなのか、それを見定めるためには、ボーダーフリー大学教員のみならず、ボーダーフリー大学に所属する学生(以下、ボーダーフリー大学生)を対象とした調査が必要であると言及している。

そこでここ数年行っているのが、上記の問いに対する学生の視角からのアプローチである。学生の視角からアプローチしようとする際に留意しなければならないのは、ボーダーフリー大学生の持つ「研究」に対するイメージは、大学教員が一般的に想定している「学術研究」とは大きく異なるものである可能性である。そこで、ボーダーフリー大学生を対象としたインタビュー調査によって、学生の持つ「研究」に対するイメージとはどのようなものであるのか、また、学生は当該大学の教員に「学術研究」は必要だと考えているのか、といった点についての検討を行ってきた(宇田・葛城 2022、葛城 2023)。

社会科学系の学部所属する4年次の学生を対象とした葛城(2023)からは、以下の知見が得られた。第一に、ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が少数ながらも存在することが確認された。ただし、そうした者は、特に学習面での問題を抱えている学生を中心に少数どころかむしろ多い可能性すらあることもあわせて指摘された。第二に、個々の学生が学習面での問題をどの程度抱えているかによって、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるかどうかについての認識が大きく異なる可能性を示唆する結果が確認された。すなわち、学習面で比較的優秀な学生は、「学術研究」の成果を教育へ還元することが、自分の学びにとってプラスに働くことと認識しているからこそ、「学術研究」が必要だと考えるのに対して、学習面での問題を抱えている学生は、「単位さえ取れて就職さえで

きればよい」と考えており、「学術研究」の成果を教育へ還元しようがしまいが、自分の学びにとってプラスに働こうが働くまいが、基本的には無関心だからこそ、「学術研究」が必要だとは考えないということである。

しかし、こうした知見は、限られた学生に対するインタビュー調査に基づくものであり、上記のような、「ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が、特に学習面での問題を抱えている学生を中心に少数どころかむしろ多い可能性」や「個々の学生が学習面での問題をどの程度抱えているかによって、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるかどうかについての認識が大きく異なる可能性」については、検討結果から導かれたものではあるものの、推測の域を出るものではない。そこで、こうした知見の検証も視野に入れて、ボーダーフリー大学生を主対象としたアンケート調査を実施したところである。次章では、この調査をもとに検証結果を提示したい。

Ⅲ. アンケート調査による検証

このアンケート調査は、2022年11月から2023年3月にかけて、西日本(関西、中四国)に所在する5つの私立大学の社会科学系学部所属する学生を対象に実施したものである⁽³⁾。このうち本稿では、ボーダーフリー大学に該当するA大学(偏差値40未満、定員充足率80%未満)とB大学(偏差値40未満、定員充足率80%以上100%未満)で得られたデータを使用する。有効回答者数は、A大学84名、B大学115名の計199名である。なお、得られた知見がボーダーフリー大学生に特徴的なものであることを示すためには、その他の大学との比較が必要であるが、紙幅の関係上、本稿では難しいため、別の機会に譲りたい。

学年別にその概要を示したのが表1である。合計で見ると、2年次生が半数以上を占めており、残る大部分を3年次生が占めている。一方、4年次生は非常に少ない上、B大学に大きく偏っている。このように、学年ごとのサンプルサイズが十分とはいえないため、本稿では2年次生と3年次生を合わせて分析を行う。すなわち、分析対象者は183名である。

表1 有効回答者の概要

	合計	A大学	B大学
1年次生	0	0	0
	0.0%	0.0%	0.0%
2年次生	117	48	69
	59.1%	57.8%	60.0%
3年次生	66	33	33
	33.3%	39.8%	28.7%
4年次生	15	2	13
	7.6%	2.4%	11.3%

注：上段は実数、下段は割合。表2・3も同様。

1. 「研究」に対する学生のイメージ

はじめに、葛城(2023)で指摘した、ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が、特に学習面での問題を抱えている学生を中心に少数どころかむしろ多い可能性すらある、という点について検証してみよう。本調査では、「教員の行う「研究」に対して、上記のようなイメージ(「これまで明らかにされてこなかったことを探究するようなもの」というイメージ⁽⁴⁾)をどの程度持っていましたか?」という問いに対し「持っていなかった」から「持っていた」までの4段階で回答を求めている。この回答状況を、「学習面での問題を抱えている学生」の代理指標としての「大学の成績」⁽⁵⁾別に示したのが表2である。なお、特に3年次生のサンプルサイズが十分とはいえないこともあり、学年による統制は行えないのだが、2年次生と3年次生とで回答状況が

有意には変わらない(カイ二乗検定、 $p>0.05$)ことは申し添えておく。

まず、全体の値をみると、教員の行う「研究」に、いわゆる「学術研究」のイメージを「持っていなかった」者は2割には満たないものの、「あまり持っていなかった」者を合わせると半数以上に及んでいる(54.6%)。葛城(2023)では、ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が少数ながらも存在すると指摘していたが、少数どころか半数以上は存在するということである。なお、こうした結果は2年次生と3年次生を分析対象としたものなので、参考までにサンプルサイズの小さな4年次生の結果もみてみると、ほぼ同様の傾向が確認できた。このことは、卒業研究を経た卒業間際の4年次生でも状況は大きくは変わらない可能性を示唆している⁽⁶⁾。

それでは、「大学の成績」別の結果をみてみよう。まず、「成績下位群」の値をみると、「持っていなかった」者は、3群の中でもっとも多く2割を超えており、「あまり持っていなかった」者を合わせると半数を超えている(55.3%)。一方、「成績上位群」の値をみると、「持っていなかった」者は「成績下位群」よりは低いものの、「あまり持っていなかった」者を合わせると半数程度(48.1%)で、「成績下位群」とあまり変わらない。残る「成績中位群」の値をみると、「持っていなかった」者こそ「成績下位群」よりは低いものの、「あまり持っていなかった」者を合わせると半数を大きく超えている(58.3%)。特に「成績中位群」と「成績上位群」の間

表2 教員の行う「研究」に対して、「学術研究」のイメージを持っていたか

	持っていなかった	あまり持っていなかった	少し持っていた	持っていた	合計
全体	29	66	58	21	174
	16.7%	37.9%	33.3%	12.1%	100.0%
成績上位群	7	18	18	9	52
	13.5%	34.6%	34.6%	17.3%	100.0%
成績中位群	14	35	29	6	84
	16.7%	41.7%	34.5%	7.1%	100.0%
成績下位群	8	13	11	6	38
	21.1%	34.2%	28.9%	15.8%	100.0%

にやや大きな差があるようにも見えるが、カイ二乗検定を行った結果、これら3群間に有意な差は確認できなかった ($p>0.05$)。

このように、ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が少数どころか半数以上は存在している。また、そうした者は、特に学習面での問題を抱えている者を中心に多いというわけではなく、その問題の有無(程度)にかかわらず多く、比較的優秀な者でも半数程度を占めている。

2. 「学術研究」の必要性に対する学生の認識

次に、葛城(2023)で指摘した、個々の学生が学習面での問題をどの程度抱えているかによって、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるかどうかについての認識が大きく異なる可能性がある、という点について検証してみよう。本調査では、「あなたが授業を受ける上で、教員が研究(「学術研究」の意)活動を行っていることはどの程度必要だと思いますか?」(括弧内は筆者)という問いに対し「全く必要ではない」から「とても必要」までの4段階で回答を求めている。この回答状況を、前節と同様に「大学の成績」別に示したのが表3である。なお、こちらについても、2年次生と3年次生とで回答状況が有意には変わらない(カイ二乗検定、 $p>0.05$)ことは申し添えておく。

まず、全体の値をみると、授業を受ける上で、教員が(学術)研究活動を行っていることは「全く必要ではない」と考える者は1割程度であり、「どちらかといえ

ば必要ではない」と考える学生を合わせても3割程度(29.9%)に過ぎない。すなわち、ボーダーフリー大学生の中には、当該大学の教員に「学術研究」がむしろ必要だと考える者が半数を大きく超えて存在しているということである。なお、こちらも参考までにサンプルサイズの小さな4年次生の結果もみてみると、同様の傾向がより顕著に確認できた。

それでは、「大学の成績」別の結果をみてみよう。まず、「成績下位群」の値をみると、「全く必要ではない」と考える者は1割程度であり、「どちらかといえ必要ではない」者を合わせると、3分の1を超えている(36.1%)。一方、「成績上位群」の値をみると、「全く必要ではない」と考える者は「成績下位群」より低く、「どちらかといえ必要ではない」者を合わせても、2割程度に過ぎない(22.4%)。残る「成績中位群」の値をみると、「全く必要ではない」と考える者は「成績下位群」とほぼ同じであり、「どちらかといえ必要ではない」者を合わせても「成績下位群」と大きくは変わらない(31.6%)。特に「成績下位群」と「成績上位群」の間にやや大きな差があるようにも見えるが、カイ二乗検定を行った結果、これら3群間に有意な差は確認できなかった ($p>0.05$)。

このように、ボーダーフリー大学生の中には、当該大学の教員に「学術研究」がむしろ必要だと考える者が半数を大きく超えて存在している。また、そうした者は、特に学習面で比較的優秀な者に多いというわけではなく、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず多く、問題を抱えている者(「成績下位群」)でも3分の2

表3 授業を受ける上で、教員が(学術)研究活動を行っていることは必要か

	全く必要ではない	どちらかといえ必要ではない	どちらかといえ必要	とても必要	合計
全体	16 9.8%	33 20.1%	82 50.0%	33 20.1%	164 100.0%
成績上位群	2 4.1%	9 18.4%	26 53.1%	12 24.5%	49 100.0%
成績中位群	10 12.7%	15 19.0%	43 54.4%	11 13.9%	79 100.0%
成績下位群	4 11.1%	9 25.0%	13 36.1%	10 27.8%	36 100.0%

程度を占めている。

3. 「学術研究」が必要だと考える理由

前節でみてきたように、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるか否か、そのレベルでの認識は、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず、大きくは変わらないようである。しかし、そのように考える理由が、学習面での問題の有無(程度)によって大きく異なる可能性はありうる。すなわち、葛城(2023)は、学習面で比較的優秀な学生は、「学術研究」の成果を教育へ還元することが、自分の学びにとってプラスに働くと認識しているからこそ、「学術研究」が必要だと考えるのだと指摘するが、そうした指摘が的を射たものであるのかどうかもさることながら、それ以外の学生はどのように考えているのだろうか。本調査では「(前節の問いで) そのように回答した理由について、できるだけ具体的に教えてください。」と自由記述で回答を求めているので、記述内容の傾向を紹介したい。

「とても必要」と「どちらかといえば必要」と回答した者の記述内容をみると、以下に示すように、「より専門的な知識と能力を身につけることができる」、「授業の内容が深くなり」、「分かりやすく」等、表現は多様であるものの、大胆に要約すれば、自分の学びにとってプラスに働くという趣旨のものが大半を占めていた。その点では葛城(2023)の指摘と同様であるが、学習面で比較的優秀な者だけがそのように認識しているわけではないという点で異なっている。ここで留意したいのは、「学術研究」の必要性というよりは、いわゆる「教材研究」の必要性というニュアンスがうかがえる記述が多いという点である。以下の記述でいえば、「成績中位群」、「成績下位群」でそれがうかがえるが、記述全体でみれば、学習面での問題の有無(程度)によって大きな差はないようである。このことから、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず、多くの者は、「学術研究」によって専門性が担保されるかどうかはさておき、「教材研究」のように理解しやすさが担保されるのを期待するからこそ、自分の学びにとってプラスに働くと認識しているのではないかと推察される。

- ・授業内容を把握する上で研究活動の内容を通して理解力を高めることでより専門的な知識と能力を身につけることができるから。(「成績上位群」)
- ・その授業を実施する上で、教員は内容について理解し、学生に対して分かりやすく解説する必要があると思うから。(「成績中位群」)
- ・教員の研究活動によって授業の内容が深くなり、また教員自身もしっかりとその分野に関して理解でき、理解ある人からの説明がなされるとこちらも聴きやすいから。(「成績下位群」)

このように、ボーダーフリー大学生の多くが、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるのは総じて、自分の学びにとってプラスに働くと認識しているからであり、それは学習面で比較的優秀な者に限ったことではない。ただし、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず、多くの者がそのように認識しているのは、「学術研究」によって専門性が担保されるかどうかはさておき、理解しやすさが担保されるのを期待するからだと考えられる。

IV. おわりに

本稿では、筆者の目下の研究課題である「ボーダーフリー大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という問いにこたえようとするこれまでの研究の成果を概観するとともに、ボーダーフリー大学生を主対象として実施したばかりのアンケート調査をもとに新たな知見を提示した。得られた知見をふまえた上で、本稿の最後に、ボーダーフリー大学教員が「専門職としての大学教員」としてどうあるべきかについて論じてみたい。

本稿で得られた知見のうちまず押さえておきたいのは、ボーダーフリー大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者、すなわち、「研究」が何たるかがよくわかっていない者が、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず多く、比較的優秀な者でも半数程度を占めているという知見である(Ⅲ-1)。彼らが教育と(学術)研究を主要な機能とする「大学」に身を置いていることを考えると、非

常に由々しき事態といえよう。

それではなぜこのような事態が生じてしまうのか。その答えはいたってシンプルである。すなわち、学生が「(学術)研究」に触れる機会が少ないからである。本調査では「(学術)研究」の成果が教育に還元されていると感じた機会がどの程度あったかもたずねているのだが、その結果をみると、学習面での問題の有無にかかわらず、「全く経験がない」あるいは「あまり経験がない」と回答する学生が半数を超えていた⁽⁷⁾。そうした機会(経験)が十分に担保されていないのだから、「研究」が何たるかがよくわかっていない者が多いというのも当然といえば当然だろう。ボーダーフリー大学教員が教育と研究の両立を果たす「専門職としての大学教員」であろうとするならば、こうした事態を打破すべく、「(学術)研究」の成果を教育へ還元することを通じてそれを果たすべきではあるまいか。なお、「(学術)研究」の成果には、自身による成果と専門分野における「新しい」成果の2つが想定されるが、本稿では前者である必要はまったくないというスタンスに立つ。

ここで留意したいのは、ボーダーフリー大学はその他の大学に比べ、「(学術)研究」の成果の教育への還元を困難なものとする要因が多いという点である。宇田・葛城(2023)は、ボーダーフリー大学教員を対象としたインタビュー調査からその要因として、「学生の学習面での課題に起因する要因」、「時間的制約に起因する要因」、「大学の組織風土に起因する要因」を抽出しているので、このうち特に「学生の学習面での課題に起因する要因」という観点から、当該大学教員が置かれている状況を説明しよう。ボーダーフリー大学では、学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れているため、特にそうした学生を授業にひきつけるのは非常に困難である。遠藤(2005)もその困難さを「講義はまさにプレゼンテーションの極意が試される」(275)と表現している。そうした学生をできるだけ授業にひきつけようと意識するほど、その内容は学生の「生活圏」に近く(近いからこそ関心が持てる)、理解しやすい話になりがちである。学生の「生活圏」からは遠く(遠いがゆえに関心を持たない)、難しくもある「(学術)研究」の話をしたところでどうせ聞いてもらえない

だろうし、理解もできないだろうと、ボーダーフリー大学教員が考えてしまうのは無理もない話である。

しかし、本稿で得られた知見を思い返してほしい。すなわち、(学生が授業を受ける上で)当該大学の教員に「学術研究」がむしろ必要だと考える者は、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず多く、問題を抱えている者でも3分の2程度を占めているという知見である(Ⅲ-2)。葛城(2023)では、インタビュー調査の結果をもとに、「学習面で比較的優秀な学生(全員とは限らない)は「(学術)研究」の成果が教育へ還元されることを実は望んでいる」(68)と述べたが、それは比較的優秀な学生に限ったことではないのである。この知見は、「(学術)研究」の話をしたところでどうせ聞いてもらえないだろう」というボーダーフリー大学教員の「思い込み」を改めることにつながるものといえよう。

ただ、本稿で得られた知見をもうひとつ思い返してほしい。すなわち、学習面での問題の有無(程度)にかかわらず、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるのは総じて、自分の学びにとってプラスに働くと認識しているからであるが、それは「学術研究」によって専門性が担保されるかどうかはさておき、「(教材研究)のように理解しやすさが担保されるのを期待するからだとする知見である(Ⅲ-3)。こうした知見は、ボーダーフリー大学教員が「(学術)研究」の成果を教育へ還元する際には、たとえ学生の「生活圏」からは遠く、難しくもある「素材」であろうとも、できるだけ学生の「生活圏」に近づける形で関心を持たせた上で、理解しやすくなるよう十分に「咀嚼」することを強く意識しなければならないことを(改めて)教えてくれる。仮にそれを意識することなく、「(学術)研究」の成果を教育へ還元する機会をただ増やしたとしても、それを「消化」できない学生(特に学習面での問題を抱えている学生)はそうした機会を否定的に捉えるだけだろう。

もちろん、「(学術)研究」の成果を上記のように工夫して還元するのはそう容易なことではないし、そもそもそうした工夫を凝らす時間を担保できないことが、「(学術)研究」の成果の教育への還元を困難なものとする一因にもなっている(宇田・葛城(2023)の「時間的制約に起因する要因」)。しかし、そう容易なことでは

ないし、工夫を凝らす時間も担保できないからやらない、ということではなく、できる範囲でその機会を意識的に増やしていくことが重要だろう。理想的には、個々の教員がそれぞれ取り組むよりは、大学なり学部なりで目標を共有した上で、組織的に取り組んだ方がその成果は格段にあがりやすくなると思われる。

そうした取組によって、多くの学生が「研究」が何たるかを（それなりにでも）理解し、（少しでも）関心をもてるようになったときにはじめて、「ボーダーフリー大学教員は、「(学術)研究」の成果を教育へ還元することを通じて、教育と研究の両立を果たす専門職である」と断言できる存在になりうるのではなからうか。逆にいえば、それができない限りにおいては、主な職務として「研究」が求められない実務家教員や教育専任教員等と何が違うのか、その存在意義が問われることにもなりかねない。こうした教員との境界が曖昧になればなるほど、「大学教員とは何者なのか」という本特集テーマの問いに対して、「ボーダーフリー大学教員とは、教育と研究の両立を果たす専門職とはいえない」とこたえざるをえなくなるのである。

なお、本稿の知見は、ボーダーフリー大学生を主対象として実施したアンケート調査によるものであるが、特に上級学年のサンプルサイズが十分とはいえない点には留意しなければならない。すなわち、上級学年（特に4年次生）のサンプルを十分に含んだ、規模の大きな調査を行えば、また違った結果が得られる可能性があることを最後に申し添えておく。

付記

本稿は、令和2～5年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究」(研究代表者：葛城浩一)による研究成果の一部である。

【注】

(1) 山田(2009)も指摘するように、「(日本の)大学研究の視点は、旧来のエリート大学、すなわち、現在の研究大学を中心にしたもの」(33、括弧内は筆者)だったからである。なお、筆者は、ある

著名な高等教育研究者から、ボーダーフリー大学研究を「金にならない研究」と揶揄されたことがある。こうした指摘の背景の一端がかいまみえよう。

- (2) このことは、三宅(2014)の「その限られた研究成果は就職活動を含めた職業選択と大学生生活に關するものに大別できる」(9)という指摘からもうかがえる。
- (3) この調査は、研究分担者である宇田響(くらしき作陽大学)が実施した「大学生の学習意識・行動に関する調査」である。詳細は宇田(2023)を参照いただきたい。
- (4) 本調査では、本稿で用いている問いの前に、「以下の質問における「研究」とは、「これまで明らかにされてこなかったことを探求するような研究」のことを指しています。その上で、以下の質問に回答してください。」と注意書きをしている。
- (5) 本調査では、「大学での学業成績は、学年でどれくらいの位置にあると思いますか?」という問いに対し「上の方」から「下の方」までの5段階で回答を求めている。このうち、「上の方」と「下の方」はサンプルサイズが十分とはいえないため、「上の方」と「やや上の方」を「成績上位群」、「真ん中あたり」を「成績中位群」、「やや下の方」と「下の方」を「成績下位群」として3群に分類した。
- (6) ボーダーフリー大学の社会科学系の学部に所属する4年次生を対象としたインタビュー調査では、卒業研究への取り組みようが一般的な授業の課題への取り組みようとほとんど変わらないことを語る学生が少なくなかった。すなわち、ボーダーフリー大学では、卒業研究が「学術研究」の意味合いを理解する契機となっていない可能性があるということである。この点については別稿にて改めて論じたい。
- (7) 「教員がこれまでに研究してきた成果が、授業内容に活かされていると感じた経験は、どの程度ありましたか?」、「専門分野における「新しい」研究の成果が、授業内容に活かされていると感じた経験は、どの程度ありましたか?」といった

問いに対し「全く経験がない」から「多くの経験がある」までの4段階で回答を求めている。「全く経験がない」と「あまり経験がない」を合わせると、いずれも6割弱であった(56.9%、57.8%)。なお、「大学の成績」の3群間に有意な差は確認できなかった($p>0.05$)。

【参考文献】

- 有本章「はしがき」有本章編『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部、2011、1-3
- 遠藤竜馬「マージナル大学のソフト・ランディングは可能かーノンエリート高等教育への提言」居神浩・三宅義和・遠藤竜馬ほか『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房、2005、267-295
- 福留東土「研究と教育の関係」有本章編『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部、2011、254-273
- 葛城浩一「ボーダーフリー大学における「教育」と「研究」の両立ー学生の視角からのアプローチ」『兵庫高等教育研究』第7号、2023、61-71
- 葛城浩一「大学教育の現状と課題ー「教育」と「研究」の関係性を中心に」『兵庫高等教育研究』第5号、2021、59-71
- 葛城浩一編『ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証の実現可能性ー教員調査報告書』広島大学高等教育研究開発センターディスカッションペーパーシリーズNo.13、2020
- 葛城浩一編『ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証の実現可能性ー学部長調査報告書』広島大学高等教育研究開発センターディスカッションペーパーシリーズNo.12、2019
- 三宅義和「大学の選抜性とは」三宅義和・居神浩・遠藤竜馬ほか『大学教育の変貌を考える』ミネルヴァ書房、2014、1-25
- 宇田響・葛城浩一「学生は教員の「研究」をどのように捉えているのか」『兵庫高等教育研究』第6号、2022、165-178
- 宇田響・葛城浩一「「学術研究」の「教育」への還元がなぜ困難なのかー教員へのインタビュー調査による試行的検討」『兵庫高等教育研究』第7号、2023、135-148
- 宇田響「社会科学系学部に所属する学生の学習意識・行動ーボーダーフリー大学生に着目して」『大学教育学会第45回大会発表要旨集録』2023、146-147
- 山田浩之「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第58号、2009、27-35